

# 石川県立美術館だより

第306号 平成21年4月1日発行

BIJUTSUKAN  
DAYORI

■ [特集] 近代日本画とその周辺 前田育徳会尊經閣文庫分館

■ [特集] 古美術優品選 第2展示室

■ 第65回現代美術展

- 企画展Topics

4月開催！「近代日本美術の精華―東京藝大美術館コレクションを中心に―」

- 開設50年にあたり 館長 嶋崎 丞

- 20年度の展覧会を振り返って(2)

- 行事案内

- 講演会記録

- バスツアー予告

- ミュージアムレポート

- 企画展Topics

「近代日本美術の精華」



青貝柳水鳥図角盆 明16世紀 前田家伝来

# 古美術優品選

I) 4月1日(水)～4月21日(火)

II) 4月25日(土)～6月1日(月)

石川県立美術館の古美術関係の所蔵品、寄託品はかなりの数にのぼります。そしてその中には久隅守景の《四季耕作図》のように、毎年展示を楽しみに全国から愛好者が鑑賞に來られる作品も多くあります。第2展示室ではそうした作品群を、毎年少しずつ切り口を変えてサイクルを組んで展示しています。したがって毎回の特集が「優品選」なのですが、今回敢えて「優品選」をタイトルとしたのは、特集を組む視点では、なかなか展示の機会が少ない作品を選んで展示するという考えによるものです。

展示作品を二点紹介しましょう。まず桜の季節にちなんだ絵画として《松浜図》屏風を挙げます。



松浜図 江戸18世紀(部分)

# 近代日本画とその周辺

I) 4月1日(水)～4月21日(火)

II) 4月25日(土)～6月1日(月)

前田育徳会所蔵の近代日本絵画コレクションを中心に紹介する特集展示です。前田家のコレクションといえば、江戸時代以前の作品を連想しがちですが、明治時代に住まいと生活様式が変化したことによって、新しい時代の作品も揃えられました。

明治三十五年(一九〇二)、長く江戸上屋敷として利用されていた本郷の地に、新たな住まいが建設されることになり、「西洋館」(四十年)と「日本館」(三十八年)が完成します。四十三年には念願叶って、新しい邸宅へ明治天皇の行幸が行われることになりました。『明治天皇紀』より行幸の記録を追いながら、本特集で展示される

作品について、紹介しましょう。

「七月八日。天候は曇り。十一時十二分、到着。前田家の親族など数十人が門で奉迎し、前田利為と妻漢子らが玄関で奉迎。はじめ西洋館で、金沢の名品や茶菓、『金沢万葉』や刀が献上された後、川端玉章の『花鳥図(波上千鳥)』などの日本画を天覧。いずれも予め頼んで描かせたものなので、もし宸慮(天皇の心)に合うものがあれば、献上すると利為。あわせて今日は、荒木寛畝・川端玉章・福井江亭らが日本館に控えており、画題を賜り、その場で揮毫させるとのこと」これが、現在も育徳会に伝わる『梅(御臨幸記念)』です。

(次号に続く)

梅(御臨幸記念)

## 企画展Topics 4月開催！

石川県立美術館開設50周年記念

# 近代日本美術の精華

—東京藝大美術館コレクションを中心に—  
4月26日(日)～5月31日(日)

石川県は、美術工芸活動の盛んな地域として知られています。その礎は、藩政時代に築かれたということができ、加賀藩前田家においては、歴代藩主ことに三代・利常、五代・綱紀を中心として、活発な文化政策が展開され、加賀の地にすぐれた名工が誕生し、強固な文化基盤が形成されていきました。そうして育まれた加賀の伝統文化を嗜好する気風は、時代の大きな節目において、危機にさらされることもありましたが、志を抱いた人々の粘り強い活動によって伝統は途絶えることなく、今日まで受け継がれているといえます。

明治維新の激動の波を乗り越え、明治から昭和前期にかけて、本県の美術文化の振興に大きな役割を担った作家たちの多くは、東京美術学校(現・東京藝術大学)に学び研鑽を積みました。とりわけ、明治二十年開校した金沢工業学校(現・石川県立工業高等学校)の卒業生の中に、二十二年開校した東京美術学校に進学するものが次第に増加し、明治後期から大正期にかけては予備校的な意味合いを帯びることになり、多くの人材が巣立っていくのでした。明治四十年には、当県出身の美校卒業生及び在校生が『東京美術学校石川県郷友会』を組織し、金沢で展覧会を開くことになり、ほぼ四、五年おきに、美校の夏期休暇を利用して開催され、日本画、洋画、彫刻、工芸、図案の各分野を含む総合展として、本県の美術界に刺激を与えました。

本展は、東京美術学校と石川という関係のうちに見出される美術活動の諸相を、当時『郷友会展』に出品された作品や、明治から昭和前期にかけて制作された石川ゆかりの作家の作品のうちに見ていこうとするもので、東京藝術大学大学美術館コレクションを中心に、当館の館蔵品も加えて約百点で構成いたします。

## 第65回現代美術展

四月四日(土)～二十一日(火) 会期中無休

(第3～9展示室)

部門 日本画(第8・9展示室)

写真 (第7展示室)

書 (第3・4・6展示室)

金沢21世紀美術館では洋画・彫刻・工芸が展示されます。

入場料 (金沢21世紀美術館と共用)

|     | 一般    | 大高生  | 中小生  |
|-----|-------|------|------|
| 当日  | 一〇〇〇円 | 六〇〇円 | 五〇〇円 |
| 前売り | 九〇〇円  | 五〇〇円 | 四〇〇円 |
| 団体  | 八〇〇円  | 四〇〇円 | 三〇〇円 |

※団体は二〇名以上

特別展示 現代美術展を支えた巨匠展(第5展示室)

65回の開催を記念して、現代美術展を支えてきた巨匠たちの作品を展示します。

昭和二十年の第一回展開催に尽力した宮本三郎・高光一也・高橋介州のほか鴨居玲・矩幸成・北出塔次郎など約三十名の物故作家による展観です。

開館時間 午前9時30分～午後6時

毎週金曜・土曜日は午後8時まで開館

※当館友の会会員は、会員証提示により団体料金

# 平成20年度の 展覧会を振り返って《2》

二十一年になりまして企画展示室で開催されたりリニューアルオープン展は二回でした。

「栄光のルネサンスから華麗なロココ展」は、十四世紀から十八世紀までのヨーロッパ絵画の流れを、「栄光のルネサンス」「壮大なバロック」「華麗なロココ」の三部構成として、ティントレット、エル・グレコ、ルーベンス、ヴァン・ダイク、ベラスケス、レンブラント、ナティエなどの作品で鑑賞していただくものでした。十七年の『華麗なる十七世紀ヨーロッパ絵画展』、十八年の『ルオー展』以来のヨーロッパ絵画展であり、多数の入場者でにぎわいました。

「百万石の大名展―前田育徳会・尊經閣文庫の所蔵品から―」は、石川県において前田育徳会所蔵の名品による大規模な展覧会としては、昭和三十八年以来四十六年ぶりの開催でした。『加賀藩成立期の歴史』、『加賀文化の確立』の

二部構成とする内容でした。初代藩主利家から五代藩主綱紀までの事績を、主に美術工芸品により紹介し、加賀藩の歴史と文化を鑑賞、理解していただきました。

今回の展示では、利春夫人画像、利家画像、芳春院画像、利長画像につきましては、前田育徳会所蔵の複製品を展示いたしました。これは前田家が明治時代に、各地の寺院に所蔵されている歴代藩主の画像を模写したものです。複製製作事業は、現在も前田育徳会の大事な事業として行われています。平成十四年に開催しました「利家とまつ 加賀百万石物語展」前田家と加賀文化」に展示しました富山県高岡市長光寺蔵『前田利長像』が、近年同寺の火災により焼失したと伺っています。複製製作事業の大切さを象徴する事

例だと思いました。

二階コレクション展示室で開催した特別陳列や特集のうち、「石川県彫刻の軌跡」「石川県日本画の精華―展覧会受賞作を一堂に―」は、二十一年に開催しました「石川県洋画の歩み」「石川県の芸術院会員・人間国宝」と同じ開催主旨の展示でした。前田育徳会・尊經閣文庫と古美術展示室の二室で開催した「加賀文化の精華」は、百万石の大名展と関連して開催したものでした。石川県の歴史、美術工芸の伝統をふまえた、地域文化に関わりのある作品を中心に収集・展示するという基本理念にのっとり収集された作品、寄託品により、すばらしい加賀文化の精華を紹介するもので、百万石の大名展とともに堪能していただきました。



利家所用の甲冑に桃山文化の粋を堪能



館長の解説で茄子茶入を鑑賞



だれもが足をとめた伝雪舟の屏風

# 美術館開設五十周年にあたって思うこと

当館館長 嶋崎 丞

本年は、石川県が美術館を開設してから、五十周年の節目の年にあたります。旧館の石川県美術館（現在の伝統産業工芸館）開館が昭和三十四年で、ようやく戦後が終わったといわれた時期であり、鉄筋コンクリート造りの県立美術館としては、戦後最も早い時期のものでした。

開館記念の名宝展図録に、当時の田谷充実知事が次のような挨拶文を寄せています。（前後を省略）

《石川県には名品名作が多く、作家活動も盛んで、県民の美術に対する関心も高く、「美術館を建設して欲しい」という県民の大きな願がありました。また、「石川県にこそ、美術館を建設すべきだ」という県外の人々の強い期待と激励がありました。その願いと期待と激励が、天下の名園兼六園の一角に実を結んで、石川県美術館が建設されたのです。》

この挨拶文からは、当時関係した人々の努力や喜びや感動がひしひしと伝わってきます。そしてそれ以降、当館は石川県という地域に育まれて伝世した文化財や、作家活動として生まれた作品を中心に、収集、保存、展示する地域色の濃い美術館として活動していくことになり、その方向は多様化した今日でも、館の運営の基本として位置づけています。

昭和五十八年までの旧館時代には、二十四年間で二八二回のテーマ展示を開催しています。旧館の展示面積は現在の美術館の七分の一と比べて狭く、展示する作品の数も限られました。しかしその状況の中で意欲的な企画展を次々と開催し、全国にも注目される美術館として成長してきたと思っています。開館十周年の「光悦・宗達・光琳・乾山・抱一名作展」には、琳派の代表作といわれる作品をほと

んど展示し、よくぞ実現できたと高い評価を受けました。県政施行一〇〇周年記念として、昭和四十七年に開催した春の「長谷川等伯展」秋の「古九谷名品展」は、設立主旨にある地域ゆかりの名作展でしたが、このテーマに基づく展観で、ここまで内容の充実した企画展はその後開催されておらず、これまた高い評価を受けました。

旧館時代の極めつけは、昭和五十四年、開館二十周年記念の「国宝 源氏物語絵巻展」でした。徳川美術館と五島美術館の両方の源氏物語を全巻展示替えせずに公開するという、無謀ともいえるもので、今振り返っても冷や汗の出る思いです。こうした展観は、後にも先にも徳川・五島美術館以外では開催されておらず、この展観で石川県美術館の地位を不動のものにしたということができます。

昭和五十八年、現在の美術館が開館し、名称も石川県立美術館となりました。従来の七倍の展示面積を持ち、二階が収蔵品を展示する常設展示部門、一階が企画展示と貸展示を行う部門となり、常設展示がいつでも鑑賞できる美術館本来の運営ができるように改善されました。

新館も開館してはや二十五年の年月が経ち、リニューアルして再開したことは記憶に新しいところですが、この間にも大型の展観や収蔵品にテーマを求めている優れた展示が行われてきました。

開館三周年記念の「障壁画名作展」。仁清の国宝を所有するつながりから、MOA美術館と共催して開催した平成四年の「野々村仁清展」、法隆寺の「百済観音展」

とリニューアル記念の「玉虫厨子」の公開、大河ドラマにちなんでの「利家とまつ 加賀百万石物語展」など、話題を呼んだ展観でした。

新館になって旧館時代と異なるところは、新たに前田育徳会展示室（リニューアル後は尊経閣文庫分館）を設置したこと、育徳会の収蔵品が公開されるようになったことです。純粹美術部門の洋画・日本画・彫刻の収蔵品が充実し、それに関連した近現代美術部門の企画展が開催されるようにもなりました。また石川県から多くの人間国宝が輩出したことにより、日本の高度な工芸美術を紹介する展観も多くなり、注目されるようになりました。さらにマスコミなどの提供による大型の企画展が開催できるようになったのも、新館が完成したからこそということができます。

美術館開設五十年という半世紀の概要について、思いつくままを記しましたが、これからの美術館活動には、実に多くのことが求められる多様化の時代に入りました。いかなれば美術館という仕掛けを使って多くの人びとを集め、美術館へやってくる人々が楽しめる活動を展開する幅広い教育活動を実施していくことが大事ではないかと思っています。作品鑑賞はもとより、各種の教育活動に参加し、美術館に対していろいろとご意見を賜りたいと思っています。皆さんとともに良い美術館づくりに、大いに努力して参りたいと思っています。

# 東西文化の交流

講師：菊池 紳一 氏(前田育徳会常務理事・尊經閣文庫主幹)

今、ご紹介いただきました菊池と申します。「東西文化の交流」というテーマでお話をさせていただきたいと思います。東西文化とは、東西の考え方、価値観の違いですね。そういった点が、どういう形で融合し、あるいは相反して、その次の時代に繋がって行ったか、ということをお話しできればいいな、と思っております。交流というのは、対立から始まりまして、対立がなければ、交流はないのです。

## ◆前田育徳会と尊經閣文庫について

まず自己紹介の代わりに、うちの財団の話を行います。はじめに「公益法人育徳財団」というのが、大正十四年に申請され、翌年認可されています。この名称が、昭和十二年に「財団法人侯爵前田家育徳財団」に変わっております。戦後、昭和二十四年には「財団法人前田育徳会」となりますが、共通しているのは、「育徳」という言葉を使っていることです。実は、戦前の財団法人の段階では、文化財はほとんど前田家の所有で、財団の所有は若干しかございません。財団の創立者でもありません前田利為公が、ボルネオで戦死をなさいますので、その後で少しずつ財団の方に文化財の寄附が続き、それを財団が管理し、また複製を作って配ることを行いました。財団が作られる二年前に、関東大震災がありました。前田家の蔵品の一部も被災を受け、他にも東京

のさまざまな文化財がなくなってしまいました。そういうことがあって、これをどうしたらよいか模索されたわけです。その一つに財団をつくって、複製をつくり、似たものをあちらこちらに残せば、何かがどこに残っていくだろうという考え方があり、財団の活動を始められました。

「育徳」とは、江戸の本郷にありました上屋敷の庭園が「育徳園」と申したことにあります。これは五代藩主の綱紀公が、「周易」という中国の書物の中から取った言葉が元です。利為は五代藩主である綱紀に心酔しておりました、綱紀を見習ってなにかをしたい、ということが一番の軸にありました。そのため分散している図書を集めなおす、ということから始めています。「尊經閣」の由来は、五代藩主綱紀が、自分の祖父である利常の本と父親の光高の本を分けて、それぞれ「小松蔵書」「金沢蔵書」、そして自分のものを「尊經閣蔵書」としたことによります。

「前田育徳会」は、尊經閣文庫が所蔵する文化財を保護して後世に伝え、研究することを目的に運営されており、「尊經閣文庫」には、加賀藩前田家が収集した典籍や古文書、美術工芸品が所蔵されているということになります。

## ◆東西文化の交流

現代でも日本という国は、東西で文化的異質がございますけれども、そういったものはいつ頃から生まれたのか、それとも元々あったのか、ということを考えなくてはならないだろう、と。そういう観点を踏まえまして、鎌倉時代を少しのぞいてみようかと思えます。

今、尊經閣文庫にある書物を見てみますと、鎌倉時代のものがいくつかございまして。その中に「関東」という言葉が頭にある書名がございます。例えば「関東式目(貞永式目)」「関東評定伝」などです。この頃から、京都の朝廷国家から自立した鎌倉幕府が支配した地域を「関東」と呼ぶようになり、それに対して「関西」という言葉が生まれたと考えられています。

東から西へは、やはり軍事力・政治力というものが伝わっています。逆に西から東へというのは、文化面が伝わってきます。軍勢は東から西に向かって進撃する場面が多く、政治的要求が出されています。一方、京都に生まれた源頼朝は、京都に郷愁と憧れを抱き、鎌倉に武家政権を樹立すると、京とを結ぶ街道の整備を進め、その結果、宗教・文化・風俗が東へ伝えられました。

二月十五日に行われた講演会を下に、  
当館の責任において、まとめたものです。

## ミュージアム レポート

# 学校出前講座 どこでもミュージアム



二月後半、出前講座、「どこでもミュージアム」を金沢市立伏見台小学校、宝達志水町立樋川小学校、野々市町立野々市小学校の三校で行いました。

### ◆二月十九日 伏見台小学校

四年生三クラスで授業を行いました。図工専科の先生と学ぶ時間でしたが、担任の先生も一緒に参加してくださいました。他の美術館での鑑賞も経験済みだったということで、大変落ち着いた様子で、また活発に意見を出して鑑賞していました。

### ◆二月二十四日 樋川小学校

こちらは、六年生の卒業記念の行事の一つとして、PTAが企画してくれたものでしたが、あいにく六年生は当日学級閉鎖。そのほかに計画されていた二年生から五年生までの各学年で実施しました。本物を前にして興奮気味の低学年には感想ゲームでウォーミングアップ。その後の学年も、それぞれ成長の段階に応じた素直な反応で大いに対話型鑑賞を楽しんでもらえました。かえすがえすも学級閉鎖が惜しまれる六年

生ですが、中学校であえることを期待します。

### ◆二月二十六日 野々市小学校

野々市小学校は今年で三度目。鑑賞の授業を行う三・四年生のうち、四年生は昨年鑑賞していて、たくさんの方が昨年度鑑賞して心に残っている作品を発表してくれました。また、休み時間には、昨年度鑑賞の授業を体験した五年生が何人も来てくれました。継続して実施させていただくことで、鑑賞の授業を受けた皆さんに、「あの絵すきだったな」「美術館の絵をまた見たいな」という心のおみやげを残せたことを感じる事ができた訪問でした。

雪がなくてもまだまだ冬真っ直中の二月。作品保護のために暖房もない展示会場では、コートを着ての授業の日もありましたが、自分達の学ぶ学校で県立美術館所蔵作品の鑑賞を楽しんでいただきました。

## 行事案内

ビデオ映／「日本美術史7ー1明治・大正・昭和西洋画の出会いと模索」(24分)

日時／四月二十六日(日) 午後二時三十分  
会場／本館ホール

### 「近代日本美術の精華」関連行事

講演会／「藝大コレクションの歴史」

講師／薩摩雅登氏(東京藝術大学教授)

日時／五月十日(日) 午後一時三十分  
会場／本館ホール

## バスツアー予告

### 飛驒の匠に出会う旅

日時／六月六日(土)

行先／飛驒高山方面  
見学地／飛驒国分寺

吉島家住宅

飛驒高山美術館

ほかを予定しています。

今回のバスツアーは日帰りで飛驒高山方面を巡り、匠の技を探ろうと思います。古刹や町家から木工文化のルーツを探ります。楽しみにして下さい。

※申込み方法等、詳細は次号に掲載します。

# 企画展Topics

〈作品紹介〉

4月開催！「近代日本美術の精華 —東京藝大美術館コレクションを中心に—」



重文 収穫 浅井 忠  
(明治23年)



月夜山水 橋本 雅邦



岩に鶴 六角 紫水  
(明治37年)



彩磁花卉文花瓶 板谷 波山  
(昭和7年)



つるされた猫 朝倉 文夫  
(明治42年)



国宝 絵因果経(部分)【特別出品】  
(奈良時代(8世紀))

すべて東京藝大美術館所蔵

## 次の展覧会

| 前田育徳会尊経閣文庫分館                    | 第2展示室(古美術)                  | 第3展示室(近現代)                      | 企画展示室                                                                   |
|---------------------------------|-----------------------------|---------------------------------|-------------------------------------------------------------------------|
| 「近代日本画とその周辺Ⅱ」<br>4/25(土)～6/1(月) | 「古美術優品選Ⅱ」<br>4/25(土)～6/1(月) | 「南政善—生誕100年—」<br>4/25(土)～6/1(月) | 「近代日本美術の精華」<br>4/26(日)～5/31(日)                                          |
|                                 |                             |                                 | ご利用案内                                                                   |
|                                 |                             |                                 | コレクション展観覧料<br>一般 350円(280円)<br>大学生 280円(220円)<br>高校生以下 無料<br>※( )内は団体料金 |
|                                 |                             |                                 | 展示室開館時間<br>午前9:30～午後6:00<br>※曜日により延長します                                 |
|                                 |                             |                                 | カフェ営業時間<br>午前10:00～午後7:00 年中無休                                          |

— 4月の休館日は22日(水)～24日(金)です。 —

石川県立美術館だより 第306号  
2009年4月1日発行(毎月発行)

〒920-0963 金沢市出羽町2番1号  
Tel:076(231)7580 Fax:076(224)9550  
URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>